



3.11 東日本大震災から10年 あの日を忘れない

あの日は朝から小雪の舞うとても寒い一日でした。

私は当時塩竈市の浦戸第二小学校（野々島）に教頭として勤務していました。この日は併設されている浦戸中学校の卒業式で、午前で無事式を終え、式に参加した小学生や中学生を午後2時過ぎの市営汽船で帰るのを見届けてから、職員室に戻り、来週に迫った小学校卒業式の準備を始めよう、としていたそのときでした。

突然、地鳴りのような轟音と下から突き上げられるような大きな揺れに襲われ、その場に立っていることさえできなくなり、思わず床に手を着き、揺れが収まってくれることを祈っていました。

（ただごとではないな。）

しばらくして揺れが収まった時、志小田校長先生と校内の職員の無事を確認、次々集まってくる島民の皆様をお迎えする準備を始めました。幸い学校は屈強な地盤の上にあったことと、高台にあったことで、津波の被害から免れましたが、三年間慣れ親しんだ美しい野々島の風景は見る影もなく失われてしまっていました。野々島の皆様は地震があると学校に避難することが徹底されていたので、幸い全員無事であることが分かりました。

ただ、宮城県だけでなく岩手、福島の沿岸部の甚大な被害の状況は、もう皆さんがご存じの通りです。

実は、こうして書いているだけでも、少し胸が苦しくなるのですが、震災の記憶を子供たちに伝えることが学校に勤めるものの使命と思い、話す機会があればこの日のことはできるだけ克明に伝えるように心掛けています。

今日、3月11日は「みやぎ鎮魂の日」。震災で亡くなった方への追悼、そして震災の記憶を風化させず伝えること、さらに復興への誓いを新たに立てる日です。

私が子供たちに伝えたいことは、命の大切さ。

あの日、突然、多くの方の尊い命が失われてしまいました。また、大切な方を失ったかたもたくさんいらっしゃると思います。どんなにか悔しい思いだったでしょう。あの日を経験して今生かされているものとして、命ある限り前向きに生きていくこと、1つしかない命の大切さを子供たちに伝えることは私たち大人の大切な使命です。

二つ目に当たり前の日常に感謝すること。

震災後、携帯電話が繋がらず、家族の安否確認もできませんでした。また電気、水道、ガスなどのライフラインも止まり、配給の食事や少ない水で長い期間を過ごしました。4月に口にしたい温かいご飯、涙が出るほど美味しかったです。震災後、行政機関では昼休みの時間消灯している（今でも続いている）のも、あの時の電力不足を忘れないためです（実は私も今でもこのことは校長室で実践しています）。ガソリンを買うのに長蛇の列ができ、5時間待って10リットル程度手に入れるのがやっとでした。

三つ目に自分の命は自分で守ること

もちろん、子供たちが学校にいるうちは私たち教職員が全力で子供たちを守ります。

でも、先日（2月13日）の地震のように、災害はいつ起きるか分かりません。そんな時、もう幼児でない小学生であれば、非常事態が起きた時に、その意味をきちんと理解し、最後は自分の命は自分で守るという強い覚悟をもって欲しい、そういう子供に育って欲しい、と願っています。

あの日の夜、遠くに見えた七ヶ浜方面が一晩中赤い炎で燃え上がる光景が今も目に焼き付いています。また、電気が遮断された中で、ポータブルのラジオの情報だけが頼りで、FMの電波に乗って伝わってくる、県内の状況を知るに連れ、実は内心、石巻にいる家族を思い、押しつぶされそうになりながら、一晩、寒い体育館の段ボールの上で過ごしました。「手代木さん、寝るしかないなあ」隣にいらっしゃった志小田校長先生も眠れないのは分かっていたのですが、余計なことは口にせず、悠然と構えている姿が何より心強かったです。

令和3年3月11日。改めて震災で亡くなった皆様のご冥福を心からお祈りするとともに、教員として子供たちに震災の記憶きちんと伝えていきたい、そんな思いで今日を迎えました。（文責：手代木）